



## 人材育成に思う

横幹連合理事 六川 修一\*



横幹連合の理事を拝命してから3年目になり、イノベーション人材の育成を一つの柱とする総合シンポジウムの実行委員長を担当することになった。近年、人材育成が大きな社会テーマとなり、リーディング大学院等様々な人材育成プログラムが実施されている。とりわけ、博士課程（研究型大学院の修士も含む）等高度技術人材をどう育成し、社会で生かしていくのかについての関心が高い。

個人的には数年ほど前から産業技術総合研究所のイノベーションスクールの講師を何度か担当させていただいた。これは博士課程を修了した学生やポスドクの学生に当該分野の専門価値をより客観的に理解してもらい、それを社会に生かす高度技術リテラシーを身につけてもらう人材育成プログラムで、特に長期のインターンシップによって民間企業での高度技術人材の活躍を促進する点に特長がある。初回の講義では、欧州の、とりわけ英国でこの十数年行われてきた研究者向けリテラシースキルを紹介したが、この際最も印象的だったのは講義後の一人の女子学生の反応である。それを要約すれば、「これまで博士課程修了者は専門にこだわりすぎて視野が狭いといわれるのでコミュニケーション能力、グループワークのスキルトレーニング、プレゼンテーション能力などを身につけようと努力したが、何をどこまでやればいいのかかわらず途方にくれていた。しかし、この講義によってこの種のトレーニングは“高度技術リテラシースキル”と呼ばれ、学術体系や教育体系がきちんとしているということを知って非常に安心した」というものである。さらに「大学でどうしてこういうことを教えてくれないのか」という半分抗議のコメントもいただいた。数学や物理などには明確な教育体系があるが、いわゆる教養ないしは社会人基礎力とでも言うべきリテラシー教育はあまり知られておらず、その学術体系などはまだ発展途上にあることもあり、認知度が極めて低い現状にある。

国際化が進み人材の流動化が進むとともに世界的には高度技術人材の獲得競争の状況にある。この脈絡で見れば、すでに述べた英国の研究者向け高度リテラシー教育は、かつての英国が大英国艦隊を要して世界進出を進め

たように、現在では人材教育の標準化とその育成メカニズムを掌握することによって世界制覇を着々と押し進めるためにある、というように見える。人材育成を世界の覇権戦争に例えるのはどうかと思うが、わかりやすく誇張していえばこのようになる。

これに対しわが国ではどうであろうか。この種の問題を考えると、議論の前提としてわが国には技術力はあるがそれを社会に生かす枠組みが十分でないとしている場合が多い。しかしながらこのような問題が提起されてから相応の時間が経ち、わが国の経済状況が必ずしも研究や開発に資源を十分投入しているとは言いがたい状況になりつつあることを考慮すれば、悪循環の結果として専門性そのものの優位性に黄信号が灯ってきているのではないか。従ってわが国としては専門性のピークを高めることとそれを社会に生かす高度技術リテラシー教育を同時に実行しなければならないという困難な状況にある。言い換えれば専門性を高めることからそれを社会に還元するところまで総合し、一連の枠組みとして考えるアプローチが求められていると言える。さらにわが国の場合、欧米流あるいはアジア流の意思決定に参画できるスキル、すなわち国際化スキルが必須である。これは語学力というよりも国際会議のプロトコルや議論のスキル、MOUなど意思決定のプロセス、ロビー活動の役割などかなり雑多な知識やスキルと捉える方が妥当であろう。

総論のあとは具体的な次の一步である。大学人としては、まずは次の3項目から始めることが重要ではないかと考えている。まさに“Think Globally, Act Locally”である。

- ・大学でのリテラシー教育の体系化、型の構築
- ・獲得できるスキルの明示
- ・スキルトレーニングを社会で共有できる仕組みの構築

\*東京大学大学院工学系研究科教授